

ら抜き言葉はどのような動詞から生じるのか

ら抜き言葉の言語変化としての正しさ

22B41280 毒島悠樹

はじめに

下一段・上一段・力行変格活用動詞で可能表現をする際、「食べられる」ではなく「食べれる」のように「ら」が脱落することがある。

これは教科書的には誤った表現であるが、「ら抜き言葉は日本語の合理的な言語変化である」という説がある。

ら抜き言葉の合理性に関して受身表現との衝突を回避できるというものがある⁽¹⁾⁽²⁾。しかし、「寝る」という動詞は受身表現が存在しない。これは、「寝る」が自動詞だからである。

そこで、他動詞の方が自動詞よりもら抜き言葉になりやすいと仮説を立て、検証した。

方法

Googleフォームでアンケートを実施した。11個の動詞を使った例文を用意し、それぞれら抜き言葉を使用するかどうか。Googleフォームは自分の所属しているサークルやInstagramなどで公開し、主に同年代の大学生の意見を募った。

結果

ら抜き言葉に対する許容度を自動詞と他動詞で分けて図1と図2に示した。自動詞と他動詞でら抜き言葉に対する違いは見られなかった。

ら抜き言葉を使用する人が半数を超えている(両方含む)動詞は全て3文字以下の動詞であった。

ら抜き言葉は日常生活で不可欠な動作の動詞でのみ受け入れられている

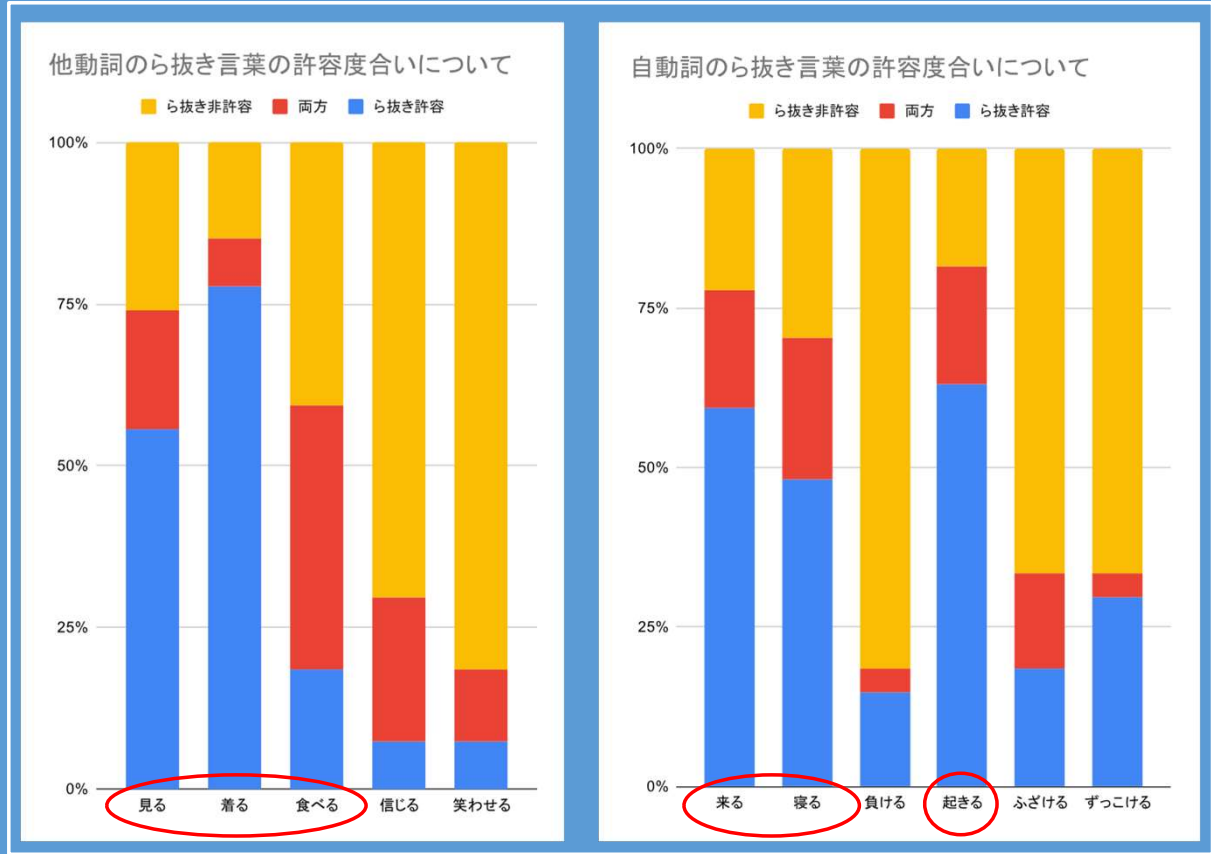


図1 自動詞と他動詞それぞれのら抜き言葉の許容度合いについて

考察

自動詞と他動詞でら抜き言葉への許容度の変化はなかったことから、意識的に受身表現を避けているわけではないと思われる。

ら抜き言葉が多用されている動詞の共通点を考えると、どれも衣食住に関連する動詞が多いことが分かった(着る、食べる、寝る、起きる)。ら抜き言葉が生じやすい動詞は、使用頻度が高く、特に日常生活に深く関連しているものだ結論付けた。

「負ける」という動詞ではあまりら抜きが見られないことから、文字数自体にはそこまで関係がなく、よく使う動詞の文字数がただ短いだけであると考えられる。

どんな動詞でもら抜き言葉を使用する人はいたので、ら抜きは合理的な変化ではあるが、特に日常生活に関連している動詞ほどら抜き言葉になるようである。

おわりに

かつて五段活用動詞でら抜きが発生した(取られる→取れる)ことから、ら抜き言葉は言語変化の中で合理的であるとみることができる。しかし、五段活用動詞の場合はその変化は100年単位で生じたものであるため、現在のら抜き言葉も言語変化の黎明期とみることができる。実際に若い人ほどら抜き言葉の使用率が多いので、数十年後には教科書が書き換わることになるかもしれない。

文献

1) 浅川哲也,ら抜き言葉と〈くれる言葉〉と可能動詞にみられる自発・受身・尊敬の用法について,言語の研究,第2号,2016年7月, p.39-54.
2) 辛昭静,言語変化に対する意識と行動の比較研究,社会言語科学,第5巻第1号,2002年9月 p117-128
https://doi.org/10.19024/jajls.5.1_117